日本海洋文学作品选读

刘军◎主编

華東理工大學出版社

ISBN 978-7-5628-5464-7

9 787562 854647 >

定价：68.00元

华东理工大学出版社

华东理工大学出版社

扫描关注官方微信

日本海洋文学作品选读

刘军◎主编

常州大学图书馆
藏书章

華東理工大學出版社
·上海·

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

图书在版编目(CIP)数据

日本海洋文学作品选读 / 刘军主编. —上海：华东理工大学出版社，2018.5

ISBN 978-7-5628-5464-7

Ⅰ.①日… Ⅱ.①刘… Ⅲ.①日语-阅读教学-高等学校-教材②日本文学-作品综合集 Ⅳ.①H369.4：Ⅰ

中国版本图书馆CIP数据核字（2018）第091517号

策划编辑 / 王一佼
责任编辑 / 金美玉
装帧设计 / 戚亮轩
出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司
地址：上海市梅陇路130号，200237
电话：021-64250306
网址：press.ecust.edu.cn
邮箱：zongbianban@ecustpress.cn
印　　刷 / 上海盛通时代印刷有限公司
开　　本 / 890mm×1240mm　1/32
印　　张 / 9.75
字　　数 / 267千字
版　　次 / 2018年5月第1版
印　　次 / 2018年5月第1次
定　　价 / 68.00元

版权所有　侵权必究

编委会名单

主　　编：刘　军

参编人员：许　晴　　杨雯淇

董子昂　　王　鹏

前　言

西方海洋文学的主流是以体验为主，这种海洋思想，在日本以一种独特的形式呈现出来，即在20世纪初形成的反映船员社会斗争的无产阶级文学思潮。因此，日本海洋文学，以船员文学的形式开花结果，直到今天，这种倾向，仍未改变。

从量上看，日本海洋文学的主流，可以称作“文献海洋小说”，即没有海上体验的作家，根据过去的记录，进行重新构建。如漂流及古代捕鲸的海洋小说，多为反映时代特色的作品。从质的方面看，在日本文学中，虽然有很多反映个人立场的内容，但是小说的描写及故事情节，还是无法超越资料的范围。

当然，作家根据自己的创意，对资料进行创造性再加工的先例不在少数。但是，大部分作品，因为过于依赖资料，从而缺乏欧美文学中所具有的深刻思想构架，且规模也比较小。

日本在明治维新之前，由于没有供远洋航海用的船只，加之日本施行锁国政策，没有产生像样的海洋文学。进入20世纪，出现了叶山嘉树的《活在海上的人们》（1926）及小林多喜二的《蟹工船》（1929）等无产阶级文学，还有井伏鱒二的《约翰万次郎漂流记》（1937）。第二次世界大战后，山冈庄八创作了《八幡船》（1952），描写了锁国前梦想奔赴海外的武士形象。到了70年代，出现了辻邦生的《正午海之旅》（1975）、新田次郎的《珊瑚》（1978）等作品。

近年来，由财团法人日本海事广报协会组织的海洋文学大奖，分为小说、纪实文学、童话等，对获奖作品进行奖励并出版获奖作品集，对于日本海洋文学的创作起了积极的推动作用 。

对于日语专业的学生来说，在日本文学史课程上，合理抽出一部

分时间，将日本海洋文学作品作为辅助教材，让学生阅读一些优秀的日本海洋文学作品，使学生能够从另一个视角了解日本文学，不仅可以学到丰富的日本海洋文学知识，提高日本海洋文学的鉴赏能力，了解日本民族的海洋文化与风土人情，而且也为进一步提高日语阅读能力打下坚实的基础。这正是开设日本海洋文学作品选读课程的动机，也是编写本书之目的所在。

本书是供日语专业使用的日本海洋文学作品选读教材。本书的学习对象主要是涉海类高校日语专业高年级学生，及其他高校日语学科相关专业学习日本文学课程的学生。

本书共有十二课，各课课序排列不以作品发表时间为序，而是从教学实际出发，着重考虑作品题材与作品的影响力。每一课内容由正文、语句注释、作者介绍和作品鉴赏四个部分构成，各部分均采用日语进行编写。作品正文选自作家的作品，大部分是节选。语句注释主要是对地名、人名、专有名词及难词的释义或提示词语在作品中的含义。作者介绍包括作者的生平、主要作品及其在文坛的地位与影响。作品鉴赏主要围绕作品的故事梗概、主题思想、创作背景、人物特征及语言风格等作简要分析。

本书的选材及编写主要参考以下文献：《小林多喜二与〈蟹工船〉》（河出书房新社）、《日本现代文学全集69》（中原厚）、《民俗学的愉乐: 神、人和自然的交涉学、谷川民俗学真髓》（谷川健一　清重伸之 现代书馆）、《大辞泉》（增补·新装版，小学馆）、《现代日本文学大系56　叶山嘉树.黑岛传治　平林泰子集》（筑摩书房）、《电子大辞泉》（三省堂）、《大辞林》（Weblio辞书）、《黑岛传细波军记・约翰万次郎漂流记》（井伏鳟二　新潮社）、《井伏鳟二对谈集》（井伏鳟二 他　新潮社）、《井伏鳟二　作家的思想与方法》（涌田佑　明治书院）、《井伏鳟二全集第六卷》（筑摩书房）、《海神丸　野上弥生子》（岩波书店）、《至〈海神丸〉: 大正期的野上弥生子》（中西 芳绘）、《野上弥生子笔记》（坂本育

雄　日本文学)、《世界的海洋文学・总解说　改订版》（小岛敦夫著 自由国民社）、《川舟考——日本海洋文学论序说》（樋口觉著 五柳书院）、《潮风雕刻的青春——海洋文学中的人间像》（伊东信著 マリン企画）等，在此谨向各位编著者表示由衷的谢意。

众所周知，外语教材尤其是文学类教材的出版，在内容编辑及文字勘校方面是有一定难度的。在原文材料的搜集整理、语句解释、作品鉴赏及作者简介的编写过程中，北海道大学国际传媒观光学院的许晴、杨雯淇、董子昂、王鹏等四位研究生付出了艰辛的劳动，在此向他们表示由衷的感谢。

由于水平有限和经验不足，本书难免存在错误和不足，切望各位专家同仁及广大读者不吝赐教，予以批评指正。

刘　军
上海海洋大学
2018年3月

目　次

第一課　蟹工船 …… 1

第二課　三等船客 …… 25

第三課　海の群星 …… 49

第四課　海に生くる人々 …… 73

第五課　深重の海 …… 95

第六課　餌 …… 125

第七課　ジョン万次郎漂流記 …… 153

第八課　癌病船応答セズ …… 185

第九課　海神丸 …… 213

第十課　オホーツク老人 …… 241

第十一課　白い波の荒野へ …… 265

第十二課　国境の海 …… 283

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一課　蟹工船

小林多喜二

一

「おい地獄さ行ぐんだで！」

二人はデツキの手すりに寄りかかつて、蝸牛が背のびをしたやうに延びて、海を抱え込んでゐる(ア)函館(1)の街を見てゐた。――漁夫は指元まで吸ひつくした煙草を唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたやう(イ)に色々にひつくりかへつて、高い船腹をすれずれに落ちて行つた。彼は身體一杯酒臭かつた。

赤い太鼓腹を幅廣く浮かばしている汽船や、積荷(2)最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてでもゐるやうに、思ひッ切り片側に傾いてゐるのや、黄色い、太い煙突、大きいな鈴のやうなヴイ、南京虫のやうに船と船の間をせはしく縫つてゐるランチ、寒々とざわめいてゐる油煙やパン屑や腐つた果物の浮いてゐる何か特別な織物のやうな……波風の工合で煙が波とすれずれになびいて、ムツとする石炭の匂ひを送つた。ウインチのガラガラといふ(ウ)音が、時々波を傳つて直接に響いてきた。

この蟹工船博光丸(3)のすぐ手前に、ペンキ(4)の剝げた帆船が、へさき(5)の牛の鼻穴のやうなところから、錨の鎖を下してゐた。甲板を、ドロス・バイブくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のやうに、行つたり来たりしてゐるのが見えた。ロシアの船らしかつた。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視船だつた。

「俺らもう一文も無え。――糞。こら。」

さう云つて、身體をずらして寄こした。そしてもう一人の漁夫の手を握つて、自分の腰をところへ持つて行つた。伴天の下のコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小さい箱らしかつた。

一人は黙つて、その漁夫の顔をみた。

「ヒヒヒヒ……」と笑つて、「花札[6]よ。」と云つた。

ボート・デツキで「将軍」のやうな恰好をした船長が、ブラブラしながら煙草をのんでゐる。はきだす煙が鼻先からすぐ急角度に折れて、ちぎれ飛んだ。底に木を打つた草履をひきづつて、食物バケツをさげた船員が急がしく「おもて」の船室を出入した。――用意はすつかり出来て、もう出るにいいばかりになつてゐた。

雑夫のゐるハッチ[7]を上から覗きこむと、薄暗い船底の棚に、巣から顔だけビョコビョコ出す鳥のやうに、騒ぎ廻つてゐるのが見えた。皆十四五の少年ばかりだつた。

「お前は何處だ。」

「××町。」みんな同じたつた。函館の貧民窟の子供ばかりだつた。さういふのは、それだけで一かたまりをなしてゐた。

「あつちの棚は？」

「南部」

「それは？」

「秋田」

それ等は各々棚をちがへてゐた。

「秋田の何處だ。」

膿のやうな鼻をたらした、眼のふちがあかべをしたやうにただれてゐるのが、

「北秋田だんし。」と云つた。

「百姓か？」

「そんだし。」

空氣がムンとして、何か果物でも腐つたすッぱい臭氣がしてゐた。漬物を何十樽も蔵つてある室がすぐ隣りだつたので、「糞」のやうな臭ひも交つてゐた。

「こんだ親父抱いて寝てやるど。」——漁夫がベラベラ笑つた。

薄暗い隅の方で、伴天を着、股引[8]をはいた、風呂敷を三角にかぶつた女出面らしい母親が、林檎の皮をむいて、棚に腹ん這ひになつてゐる子供に食はしてやつてゐた。子供の食ふのをみながら、自分では剝いたぐるぐるの輪になつた皮を食つてゐる。何かしゃべつたり、子供のそばの小さい風呂敷包みを何度も解いたり、直してやつてゐた。さういふのが七、八人もゐた。誰も送つて来てくれるもののゐない内地から来た子供達は、時々そつちの方をぬすみ見るやうに、見てゐた。

髪や身體がセメントの粉まみれになつてゐる女が、キャラメルの箱から二粒位づつ、その附近の子供達に分けてやりながら、

「うちの健吉と仲よく働いてやつてけれよ、な。」と云つてゐた、木の根のやうに不恰好に大きいザラザラ[9]した手だつた。

子供に鼻をかんでやつてゐるのや、手拭で顔をふいてやつてゐるのや、ボンボン何か云つてゐるのや、あつた。

「お前さんどこの子供は、身體はええべものな。」

母親同志だつた。

「ん、まあ。」

「俺どこのア、とても弱いんだ。どうすべかッて思ふんだども、何んしろ……。」

「それァ何處でも、ね。」

——二人の漁夫がハッチから甲板へ顔を出すと、ホッとした。不氣嫌に、急にだまり合つたまま雑夫の穴より、もつと船首の、梯形の自分達の「巣」に帰つた。錨を上げたり、下したりする度に、コンクリート・ミキサの中に投げ込まれたやうに、皆は跳ね上り、ぶッつかり合はなければならなかつた。

薄暗い中で、漁夫は豚のやうにゴロゴロしてゐた。それに豚小屋そつくりの、胸がすぐゲエと来さうな臭ひがしてゐた。
「臭せえ。臭せえ。」
「そよ、俺だちだもの。ええ加減[10]、こつたら腐りかけた臭ひでもすべよ。」
赤い臼[11]のやうな頭をした漁夫が、一升瓶そのままで、酒を端のかけた茶碗に注いで、鰯をムシャムシャ[12]やりながら飲んでゐた。その横に仰向けにひつくり返つて、林檎を食ひながら、表紙のボロボロした講談雑誌を見てゐるのがゐた。
四人輪になつて飲んでゐたのに、まだ飲み足りなかつた一人が割り込んで行つた。
「……んだぺよ。四ケ月も海の上だ。もうこれんかやれねべと思つて……。」
頑丈な身體をしたのが、さう云つて、厚い下唇を時々癖のやうに嘗めながら眼を細めた。
「んで、財布これさ。」
干柿のやうなべつたりした薄い蟇口を眼の高さに振つてみせた。
「あの白首[13]、身體こつたらに小せえくせに、とても上手えがつたどオ！」
「オイ、止せ、止せ！」
「ええ、ええ、やれやれ。」
相手はへゝゝゝゝと笑つた。
「見れ、ほら、感心なもんだ。ん？」醉つた眼を丁度向ひ側の棚の下にすえて、顎で、「ん！」と一人が云つた。
漁夫がその女房に金を渡してゐるところだつた。
「見れ、見れ、なア！」
小さい箱の上に、皺くちゃになつた札や銀貨を竝べて、二人でそれを数えてゐた。男は小さい手帖に鉛筆をなめなめ、何か書いてゐた。

「見れ。ん！」
「俺にだつて嬶[14]や子供はゐるんだで。」白首のことを話した漁夫が急に怒つたやうに云つた。
　そこから少し離れた棚に、宿酔の青ぶくれにムクンだ顔をした、頭の前だけを長くした若い漁夫が「俺アもう今度こそア船さ來ねえッて思つてたんだけれどもな。」と大聲で云つてゐた。
「周旋屋[15]に引つ張り廻はされて、文無しになつてよ。又――、長けえことくたばるめに合はされるんだ。
　こつちに背を見せてゐる同じ處から来てゐるらしい男が、それに何かヒソヒソ[16]云つてゐた。
　ハッチの降口に始め鎌足を見せて、ゴロゴロする大きな昔風の信玄袋[17]を擔つた男が、梯子を下りてきた。床に立つてキョロキョロ見廻はしてゐたが、空いてゐるのを見付けると、棚に上つてきた。
「今日は。」と云つて、横の男に頭を下けた。顔が何かで染つたやうに、油ぢみて黒かつた。「仲間さ入れて貰えます。」
　後で分つたことだが、この男は、船へ來るすぐ前まで夕張[18]炭鑛[19]に七年も坑夫[20]をしてゐた。それが此の前のガス爆發で、危く死に損ねてから――前に何度かあつた事だが――フイと坑夫が恐ろしくなり鑛山を下りてしまつた。爆發の時、彼は同じ坑内にトロッコ[21]を押して働いてゐた。トロッコに一杯石炭を積んで、他の人の受持場まで押して行つた時だつた。彼は百のマグネシュムを瞬間眼の前でたかれたと思つた。それと、そして1/500秒もちがはす、自分の身體が紙ッ片のやうに何處かへ飛び上つたと思つた。何豪といふトロッコがガスの壓力[22]で、眼の前を空のマッチ箱よりも軽くフツ飛んで行つた。それッ切り分らなかつた。どの位経つたか、自分のうなつた聲で眼が開いた。監督や工夫が爆発が他へ及ばないやうに、坑道に壁を作つてゐた。彼はその時壁の後から、助ければ助けることの出来る炭坑夫の一度聞いたら心に縫ひ込まれでもするやうに、

決して忘れることの出来ない、救ひを求める声を「ハツキリ」聞いた。——彼は急に立ち上がると、氣が狂つたやうに、

「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこんで、叫び出した。（彼は前の時は、自分でその壁を作つたことがあつた。そのときは何でもなかつたのだつたが。）

「馬鹿野郎！ここさ火でも移つてみろ、大損だ。」

だが、だんだん声の低くなつて行くのが分かるではないか！彼は何を思つたのか、手を振つたりわめいたりして、無茶苦茶に坑道を走り出した。何度ものめつたり、坑木に額を打ち付けた。全身ドロと血まみれになつた。途中、トロッコの枕木になまづいて、巴投げにでもされたやうに、レールの上にただきつけられて、又気を失つてしまつた。

その事を聞いてゐた若い漁夫は

「さあ、ここだつてさう大して變わらないが……。」と云つた。

彼は坑夫獨特な、まばゆいやうな、黄色ッぽく艶のない眼差を漁夫の上にぢつと置いて、黙つてゐた。

秋田[23]、青森[24]、岩手[25]から「百姓の漁夫」のうちでは、大きく安座をかいて、両手をはすかひに股に差しこんでムシツとしてゐのや、膝を抱えこんで柱によりかかりながら、無心に皆が酒を飲んでゐるのや、勝手にしやべり合つてゐるのに聞き入つてゐるのがある。——朝暗いうちから畑に出て、それで食えないで、追拂はれてくる者達だつた。長男一人を残して——それでもまだ食えなかつた——女は工場の女工に、次男も三男も何處かへ出て働かなければならない。鍋で豆をえるやうに、餘つた人間はドシドシ土地からハネ飛ばされて、市に流れて出てきた。彼等はみんな「金を残して」内地に歸ることを考へてゐる。然し働いてきて、一度陸を踏む、するとモチを踏みつけた小鳥のやうに、函館や小樽[26]でバタバタやろ。さうすれば[エ]、まるッきり簡単に「生まれた時」とちつとも變わらない赤裸になつておつぽり出された。内地へ歸れなくなる。彼等は身寄りのない雪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com